

サザンクロス

vol.5

KINAN HOSPITAL
OFFICIAL INFORMATION PAPER

July.1.2009

上芳養診療所



社会保険紀南病院は、へき地医療拠点病院として田辺保健医療圏内の無医地区への医師派遣に協力しています。田辺市からの要請により、秋津川診療所と上芳養診療所に当院の医師を派遣しています。週2回の診療ですが、高血圧などの内科疾患を抱えられた方や変形性(膝)関節症の方が多くこられ、大変好評を頂いております。

上芳養診療所出張診療している赤木副院長も、高齢で一人暮らしのため診療所がなければ医療を受けられない住民の方もいて、今後も診療所は必要と認識しており、これからも診療所への医師派遣を継続していきます。

今後もへき地拠点病院として地域医療に貢献していきますので、よろしくお願ひします。

秋津川診療所



上芳養診療所

時間 \ 曜日	水曜日	金曜日
AM9:00~	×	○
PM15:00~	○	×

秋津川診療所

時間 \ 曜日	月曜日	水曜日
AM9:00~	×	○
PM14:00~	○	×

お産の費用

病院長 山本 忠生

江戸時代のお産は、出産10日から60日前に実家に帰り、産後1ヶ月は実家で静養した。「武士の家計簿」によれば着帯などのお産の準備、産婆、医師へのお礼、出産後3日目、7日目のお祝い、生着、など合計銀158匁(現在の米価から換算すると105,228円、現在の賃金から換算する生活実感価値で632,000円)の費用がかかり、出産費用の半分以上は妻の実家が負担している。この時生まれた嫡男が満8歳で天然痘にかかった。息子の大病に父は役所で借金をしてその金で食材を買い栄養をつけさせた。18日間の闘病生活で3人の医者にも5回往診を受けた。当時の風習に従って、祭壇を作り赤紙とお神酒を供えて痘瘡神を祭った。この18日間の費用は銀2,625文(生活実感価格124,950円)であった。江戸時代も今も変わらぬ市井の様子が見えてくる。

今や東京、ニューヨーク間の所要時間は、江戸、大阪間より短く、インターネットが発達し、世界は狭くなった。しかし科学技術の進歩が、人類の「よく生きる」という根本的な問題を前進させていないのが問題である。現在は、組織や制度さえよければすべてうまくいくと思われているが、実際は組織や制度の欠陥を人間の良識とチームワークが補って解決しているものであり、組織や制度が人間の欠陥を埋めてはくれない。本当に大切なのはそこに存在する「人」で組織や制度ではない。

今回、新型インフルエンザ(Swine influenza)の国内発生を最初に見つけたのは、季節外れのインフルエンザの流行に疑問を感じた神戸の校医で、彼が組織や制度の隙間を埋めた。神戸大学の岩田教授はインフルエンザの診療に関して「毎日の診療を大切に、チームを大切に、そして自分がチームに何が出来たかを考えてください。」と述べている。これは、ほかの疾患の診療にも通じる話である。お互いを信頼している集団は他の集団よりも強い。機械化のできない医療の現場でこそ、「人」の力とチームワークが大事である。最近の自治体病院を取り巻く環境は厳しいが、指導する先輩の熱意と、それに応える若い力があれば前途は明るい。

参考文献:磯田道史「武士の家計簿」新潮新書、新潮社2003

Southern Cross

kinan hospital official information paper

地域医療連携だより

医者が1人だったら・・・時間外の診療で思い知らされること

医者が1人で診療せざるを得ない時、検査や処置が必要になった場合は、無力ではないが極めて時間的、肉体的に効率の悪い状況に追い込まれる経験は開業医になって初めてわかったことである。こんなときは私を取り巻くスタッフの有難さを嫌というほど思い知らされ、足を向けて寝れない気持ちになるのである。彼女達なしでは私はほとんど力が発揮出来ない!

ある日曜日の朝8時頃診察依頼があった。「一時間前から何かのどのあたりが不愉快な感じが続いている。風邪でもないようだが経験したことのない感じ。」「胸の痛みはないの?」と聞くと「はっきりしない」とのお返事。直接診なければわからないかと考えて「ではこれから来てください。」と返事。30分ぐらいて来院。心臓関係でないことだけは確認しないとイケないかと考え、しつこく「急に起こったの?胸の変な感じはないの?」「そう言われれば急におこったし胸も変な感じ」とこれまたあいまいなお答え。一般状態は特に変わりはないが心電図をとったらやっぱり心筋梗塞。「心筋梗塞だと思うのでこれから救急車で病院に行くからね」と説明すると「ここまで自分の車で来て、ここからは救急車なんて嫌だ。自分の車で行く」としばらくごちゃごちゃ言う。こちらはゴールデンタイムが気になりイライラ。「その気持ちはわかるけど今は私の言うことを聞きなさい!」と久し振りに閻魔様の形相で一喝。受け入れ病院に連絡して、手紙を書いて、救急隊に連絡して・・・結局来院してから送り出すまで40分。やれやれと一息ついたときにご近所の人から「朝から吐き気があるので診てほしい」と電話あり、心の中で「クスリで対応できそうだな」と考えて「いいですよ」と返事したらすぐに来られた。「おなかの風邪かな。もし吐くのが続くようであれば当番病院で点滴しなくてはいけなかもしねえ」と説明したときに嘔吐。更に五分後又嘔吐。「タイミングが良すぎる?悪すぎる?」・・・「ではここで点滴します」ということになり点滴中は嘔吐のたびにトイレに同伴、帰られたのは一時間半後であった。後始末して気が付いたら正午であった。朝食兼昼食を食べようとしたら「腹が張って苦しい。便が出そうで出ない。今クリニックの前に来ている」とのこと。「ああ!今日はしょうないな・・・」とあきらめ診察。腹部X線で腸閉塞のサインないこと確認して直腸診したら硬い便がいっぱいでまさに「出そうで出ない」状態。「これは辛いわ」ということで排便して

浣腸かけて格闘すること30分。どっさり出て「あー!すっきりした。辛かったけど・・・」「そりゃよかったね。私も経験あるので出そうで出ないときの辛さはよくわかる」ということで来院して約1時間後に帰られたが私はどっと疲れが出てきた。何のことはない。三人の患者さんをみるのに5時間あまり(もちろん会計などはわからないので一切しない)。これが診療時間帯であれば私の関与する時間はおそらく30分以内かと思われる。「医者1人で何もかもするのはほんまに効率悪いなあ。患者も結局時間かかるし患者にとってもいいことではないし・・・」とぼやくぼやく。スタッフの顔が次々と浮かぶ。

35年前に山形県でウシを相手に臨床獣医師として三年間働いたがすべて往診である。1人で車に乗って一日約10-15件みるのであるが助手は農家のみ。いわゆる問診、診察、点滴、投薬、を行い、尿や血液や胃液、糞便の検査が必要なときは検体をとって、診療所に帰ってからすべて自分で白血球や虫卵、胃液原虫を調べ、薬や軟膏の調合もやっていた。つまりこの頃は今の医師、看護師、薬剤師、検査技師さんの仕事を今と比べて相当レベルは低いがそれでもすべての過程にかかわっていたので流れがよくわかったし診療効率が悪いという感じはなかった。また獣医師は全科みなくてはいけないので帝王切開や200リットル(ドラム缶ひとつの大きさ)もある胃の切開などの外科手術や小動物の骨折のピンニングなどもやらざるを得なかった。

休日の朝に難産で呼ばれた。胎児は既に死亡しており気腫状態、子宮口も狭く、「帝王切開しか手はない」・・・しかし自分ではした事がない。又帝王切開などはその地方ではされたことがないらしく、先輩医師に連絡するも二時間後しか来れないとのこと・・・教科書読んで頭に入れて待つこと30分、母牛がやや弱りだしたので「待ってたら間に合わないで今からやる」ということで開始(よくやったもんです。信じられません)。奇跡的に?45kgの胎児摘出して無事終了。母牛は助かったがいわゆる産後の肥立ちが悪く乳牛としては価値なしということで一ヵ月後屠殺場に送られた。経済動物の運命である。またサルファ剤を静脈注射して針を抜いて「今注射したので・・・」と説明しようとしたら大きなうめき声とドスンという音が後ろで聞こえたので振り向いたら、500kgの牛が仰向けに倒れていて既に死亡していた。恐らく「アナフィラキシー」による死亡事故だったのでしょうが、オロオロしている私の前に10分後所長が駆けつけてくれて農家となにやら?相談、「お咎めなし」となった。当時時間外という概念はなく請われれば駆けつける生活(農家は自然に気を使ってくれていて余程でないし電話は来ないという自然にお互いを気遣う時代でした)であったが「忙しいけれどゆったりとした時代」で今のような医療事故で訴えられることもなく、よかれと思ったことはどんどん取り組めた時代であった。

医療は進歩したといわれる。しかしそれは医師以外の人たちが加わってチームとして取り組めたときにしか力が発揮出来ない。その事実は医師1人で診療したときに嫌というほどわかる。自分を楽にする?技術を磨く?ためにもスタッフは大事にしなければいけないということを開業医の時間外の診療は教えてくれるのであるが、たびたび経験したくないというのも本音である。



水本内科クリニック
水本 博章



水本内科クリニック

緩和ケアチーム発足1年の活動内容と外来開設のご報告

麻酔科部長 内藤 京子



北條 理恵 内藤 京子
(地域医療連携室 看護師)

紀南病院の緩和ケアチームは昨年3月に発足し、手探りで右往左往しながらも、何とか1年で臨床心理士、専従看護師がチームに加わり、これまでに約50人の方々に関わらせていただきました。当院には緩和ケア病棟が無く、緩和ケアチームの医師も兼任のためコンサルテーション型の緩和ケアチームであり、主治医や病棟スタッフのサポート役になることを心がけています。発足当初は身体症状(疼痛、呼吸困難など)での紹介が多かったのですが、臨床心理士さんの評判が良く、精神症状(心のつらさなど)の緩和依頼が目立って増えてきており、うれしい限りです。

この5月から毎週水曜日午後2時より、完全予約制で身体症状緩和の医師と臨床心理士、専従看護師による緩和ケア外来を開設しました。

近年のがん医療が目覚ましい進歩により、担がん状態で悩みや痛みを抱えたまま、外来通院治療を長期間受けておられる方が増加しています。外来から関わることで、より早い時期からの身体・精神的苦痛の緩和を目指したいと考えています。ゆっくりお話を伺えるように、予約はすべて各科からの紹介を受ける完全予約制にさせていただいています。今後とも緩和ケアチームの活動へのご理解・ご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いたします。

注記

完全初診の方はお受けしておりません。一旦各科に受診していただく方針です。ご不明の点は、緩和ケアチームか地域連携室までお願いします。

看護学校だより

5月1日(金)、看護の日(5月はナイチンゲールの誕生月)に田辺市法輪寺にて「和願愛語(わげんあいご)」をテーマに講演をききました。和やかな笑顔と優しい言葉が和願愛語です。いつくしみの思い出を持って、いつくしみなる母が赤子に対する思いを蓄えて言動することこそ愛語であります。とても広く立派な境内で、静かに御住職のお話を聞きました。



6月13日(土)看護学生体験が開催されました。

2年生が中心に、地域の高校生を対象に看護技術を伝えました。手洗いと血圧測定を行い、その後、高校生と看護学生との交流の場をもちました。

学校説明会のお知らせ

日時 8月9日(日)

時間 AM10:00~11:00

学生募集要項

校内見学

学校案内について

などなど

予約不要

Southern Cross

病院のまど

第19回市民健康講座のお知らせ

思春期とは「自分探しの航海」と言われ、アンバランスな心と体で、色々な悩みをかかえながら大人へと成長していく大切な時期です。

その子供達に、性に関してどの様に接して伝えれば良いか悩んでる保護者の方達、一緒に考えましょう。

日時 平成21年7月12日(日)
時間 PM2:00~3:00
会場 紀南病院 3階講堂
演題 思春期の子供達のこころと身体
～命の誕生の感動と感謝を通して
こども達の性と健康を考える～
演者 谷前弘代(紀南病院助産師・上級思春期保健相談士)

発熱外来について

発熱外来は、田辺保健所が新型インフルエンザの疑いがあると判断した患者様のみ受付しています。ここ1週間以内に海外渡航の経験がある方、若しくは兵庫、大阪及び滋賀に旅行、滞在歴がある方で、高熱の症状が出た方は、まず田辺保健所(26-7933)にご相談下さい。

なお、旅行経験がなく発熱されている方は、通常の外来診療で対応させていただきますので、よろしくお願ひします。

発熱外来訓練(平成21年5月1日)がNHKで報道されました。

新型インフルエンザの国内発生に備え発熱外来を開設し、新型インフルエンザの疑い患者が発生との想定で、発熱外来訓練を実施しました。防護服の着用始まり、受付、診察とまさに本番さながらの訓練で、その模様は、当日のNHKの関西845で詳細に報道されました。



編集後記

新型インフルエンザ騒動のさなかですが、今年のサラリーマン川柳の大賞が発表となりました。メタボ健診の影響でしょうか、ダイエットに関連する内容が多かったようですね。一位は、「しゅうち心 なくした妻は ポーニョポニョ」ですが、個人的には、「朝バナナ 効果があったのは お店だけ」に笑えました。何事も流行に飛びつきやすいのが日本人のようで…。

今までにも納豆や寒天などなど品切れ続出でしたねえ。しかし、思わずドキッとしたのが、「ぼくの妻 国産なのに 毒がある」

皆さんはいかがでしょう?
(H記)



社会保険紀南病院
〒646-8588
和歌山県田辺市新庄町 46-70
Tel 0739-22-5000
Fax 0739-26-0925
<http://www.kinan-hp.or.jp>

DPC導入

7月1日より、入院費の計算方法が変わります。国は、急性期病院の入院報酬についてDPC(診断群分類)に基づく包括評価制度を導入しています。これは、病名ごとに入院一日の報酬額が決められており、それに基づいて報酬を請求するという方法です。詳しくは医事課までお問い合わせください。

職場におけるセクシャルハラスメント

平成21年6月20日 医療安全管理研修

当院が安全良質な医療を提供するためには、職場でのセクハラを防止し働きやすい職場作りが大切です。この度、和歌山県男女共生社会推進センターより神徳佳子先生をお招きし、セクハラ研修を行いました。セクハラを防止するには、事業所が「セクハラを許さない」という方針を出すこと、気軽に相談できる部署の設置、といった防止対策を取ることが大切であることを学びました。セクハラのない職場作りに大いに参考になりました。

Southern Cross